

LRRP

Long Range Reconnaissance Patrol

長距離偵察行

Cover Photo
Kesaharu Imai
© WORLD PHOTO PRESS 2022
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

- 上野公園で久しぶりのベトナムフェア——。
- 004 **ベトナムしちやった最高の日**
Saigon Memories
- 024 第41回 **サイゴン物語**
記者たちのベトナム戦争 [18]
まだ語られていない
- 028 **LST船員の記録 第3回**
UNTOLD SEAMAN BLUES
- 044 **ベトナムを遠く離れて——。**
私的ベトナム戦争映画 / TVムービー Part 5 文/小倉徹
ここは地獄の一丁目……アメリカ軍が訓練用につくった
- 046 **“ベトコンビレッジ”**
トンネルラットと呼ばれた兵士たち Part 4
- 054 **Tunnel Rat** 敵のネズミを追え
資料収集と現地視察
- 062 **ベトナム戦争 激戦地の戦跡探訪**
第1回：南部編 文と写真/三野正洋
- 066 **ウェスタンアームズ新製品レポート**
●by SHOTGUN MARCY
●コルト・ガバメント コブラ・カスタム
リアルスチールVer
●ベレッタ M8045 クーガー F CBHW
- The Equipments of the U.S. Force
- 075 **[現用米軍装備カタログ]**
「海」装備特集 part 5 90年代の強襲上陸装備特集
ロンドン・ブリッジ・トレーディングLBT-1195 ●解説/松原隆
- 084 **東京マルイ 新製品レポート** ●by Takeo Ishii
●速報! LCPII、CURVE、VSR-ONE
●BBエアリアルボルバーPRO COLT SAA .45
SINGLE ACTION ARMY 5-1/2インチ アーティラリー



089 **トイガンニュース**
●TANAKA SMOLT 6インチステンレス
& M40タクティカルオールブラック

090 **Militaria Roundup!**
続・アメリカ軍従軍章

096 **新製品情報 COMBAT mono**

098 **THE グリーンベレー** ●文/DJちゅう
GREEN BERET
GEARLOG RESURRECTION GREEN BERET PLAYERS
#ギアログレザレクション予告

100 **ギアログレポート**

102 **サバゲ三等兵APS部**
歴代最良のトリガーフィール!
マルゼンAPS-3
リミテッドエディション2021
コスミックシルバー登場!

COMBAT FRONT LINE

- 106 今月の中田焦点! HELIKON-TEX
レンジ フーディ トップクール
- 108 新作映画情報「ギャング・オブ・アメリカ」
「ライダーズ・オブ・ジャスティス」
「シルクロード.com—史上最大の闇サイト—」
- 104 第17回 Stringer Blues 写真・文/横田徹
- 107 レアミリタリーテクノロジー
- 109 読者PRESENT & CIC
- 111 奥付&次号予告



ミリタリースポッター

Aviation Machinist's Mate Airman Nathan Mitchell performs maintenance on the tail rotor of an MH-60S Sea Hawk helicopter.

MH-60S Sea Hawk helicopter from the Golden Falcons of Helicopter Sea Combat Squadron (HSC) 12 on the flight deck of the aircraft carrier USS George Washington (CVN 73).

Photo/US Navy

なぜこの角度になったのか。下段のフライトデッキからなめるようにして、艦橋を見上げる格好になっている。船の名前はアメリカ海軍航空母艦ジョージ・ワシントンである。一時期、横須賀を母港にしていたことがあり、日本と縁がある。手前でブラウンのジャージを着用したデッキクルーが、作業をしている。彼はエビエーション・マシニストメイトのネイサン・ミッチェルという。彼が素手で取り組んでいるのはMH-60S シーホークのテイルローターである。



LRRRP

Long Range Reconnaissance Patrol

長距離偵察行

Photo/Kesaharu Imai Text/Kentaro Suzuki

偵察は無駄足に終われば味方は安全、運悪く全滅しても“強力な敵がいる”というメッセージになり

非常に有意義ではあるが当事者にとってはまったく割りに合わない任務で、敵地を何日にも渡って歩き、情報収集から遊撃戦まで行なう長距離偵察ともなればもはや偵察というより苦行である。この任務あるいは任務に従事する者を指す

LRRRPの4文字には素人の想像をはるかに超える苦勞と危険、そしてプライドが詰まっている。

ヘリから降りたばかりの偵察チーム。ローターの轟音と大きく波打つ周囲の草木によって非常に目立つ上に無防備な状態をさらすLZ (Landing Zone=着陸地点) は敵にとって絶好の攻撃目標となるが、ここでは何事も起こらなかった様だ。LRRRPは3日間から長いときには7日間も敵地で行動するのだが、その存在が敵に露呈しない様にヘリの補給を受けず手持ちの物だけでやりくりしなければならないため、彼らが携行する水、食料、弾薬などの総重量は必要最低限でも30kgを超えてしまう。写真でもふくれあがったリュックサックが印象的な偵察チームの後ろに写る広大な山のどこかに解放戦線か北ベトナム軍がいる。

長距離偵察とは——。

LRRP

Long Range Reconnaissance Patrol

その頭文字を取ってLRRP、あるいはラープという発音からまれにLURPと記されるアメリカ陸軍長距離偵察部隊のコンセプトは、ソ連が率いる東側陣営と国境を接して向かい合う西ドイツ駐留の第7軍で生まれ、50年代の終わりには有事の際に少人数で国境を越え、敵の動向や重要な目標を探るLRRP中隊が編成されている。60

年代に入ると正式なマニュアルと訓練プログラムが作成され、同じく西ドイツに拠点を置く第10特殊部隊グループの特別講習まで受けていたLRRPは次第に軍上層部の注目を集め、ベトナム戦争ではニャチャンの第5特殊部隊グループによる訓練で長距離偵察、ゲリラ戦、サバイバルのノウハウを学んだ15個のLRRP中隊お

よび分遣隊が戦いを有利に進めるべく、主力部隊から20km以上も先行して情報収集を行っただけでなく、積極的に敵と交戦する“ハンターキラー”と呼ばれる任務にも投入されて目覚ましい戦果を挙げた。敵味方の双方から恐れられる存在となったLRRPは南ベトナム軍やオーストラリア軍、韓国軍でも同様の部隊が運用され、アメリ

カ軍ではすべてのLRRP中隊と分遣隊が1969年にレンジャー中隊として再編されるのだが、書式上はレンジャー隊員となった彼らの配属先と任務の内容はその後ほとんど変わらず、限定支給品や現地調達品の迷彩服に身を包んでさまざまな武器を使いこなす彼らはベトナムで活躍した特殊部隊、あるいはコマンド部隊のイメージ

作りにも一役買った。ベトナムのLRRPは通常4～6人編成の偵察チームで行動し、任務によっては10～12人編成の通称“ヘビーチーム”で出撃することもあった。彼らは輝かしい活躍の一方、その任務があまりにも危険だったためにベトナム撤退後は各レンジャー中隊が第75レンジャー連隊の基幹部隊として統合されるとともに

LRRPは一般部隊の編成から一度は姿も消したものの、80年代にはハンターキラーなど攻撃的な任務は行なわず、情報収集に専念するLRSU (Long Range Surveillance Unit=長距離監視部隊、ラースと発音するらしい) として生まれ変わり、グレンダ侵攻や湾岸戦争、そして対テロ戦争でも数々の貴重な情報を提供した。



バラックの前に整列した韓国軍の偵察チーム。アメリカ軍の供与品であるM16ライフルやM1956個人装備はベトナムに派遣された韓国軍の一般部隊でも使用例があるが、解放戦線を意識した黒い戦闘服はおそらく現地調達品でアメリカ軍や南ベトナム軍のLRRPでも好んで用いられている。ヘッドギアに目を移すと韓国軍支給品と思われるファティグキャップのほかにアメリカ軍用や現地調達品のブーニーハット、さらに北ベトナム軍の防暑帽まで着用されており、彼らが韓国軍の所属であることをはっきりと示すのは左肩の韓国陸軍第9師団“白馬”のバッジだけである。第9師団は1966年9月から1973年3月まで南ベトナム第2軍管区のニンホアを拠点として活動し、1328名の戦死者と2410名の負傷者を出した。

UNTOLD SEAMAN BLUES

写真と語り／木村 守 (元LST乗組員)
文／吉野文敏 構成／編集部

【第3回】

まだ語られていない
LST船員の記録

LST乗組員に採用されてすぐに出港した初航海で
1965年後半をベトナムの海と港で過ごした木村さん。
その年の暮れに水と食料の補給のため横浜に帰港した後
1966年1月にはすでに2回目の航海に出ていた。
船酔いで七転八倒したLSTの揺れにも慣れ
心には少し余裕が生まれ、手には新しいカメラもあった。



南ベトナムの首都だったサイゴン(現ホーチミン市)へと何度も通ったサイゴン川。物流の大動脈で、小さな船着き場がいくつもあり、生活物資を運ぶはしけが走り、サイゴンの港に接岸できない貨物船も荷下ろしにはしけを使う。膨大な数のはしけが物流を支えていた。



★ VIET CONG VILLAGE

アメリカ軍は第二次大戦においてすでに戦地の街並みに似せた外見を持つ訓練用施設を建設、使用しており、ドイツや日本を真似た施設が作られたあと、朝鮮戦争の勃発とともに朝鮮を模したものが加わり、ベトナム戦争時には解放戦線の勢力下にある村と同じ特徴を持つ施設が作られている。ベトコンビレッジという通称を持つこの施設は従来の戦争とは戦術がまったく異なる対ゲリラ戦を訓練するために建設され、ブービートラップへの対処法やトンネル捜索のノウハウだけでなく、当時はクイックキルと呼ばれていた至近距離での射撃術および近接格闘の指導も行なわれていた。さらに仮想敵の兵士が黒い農民服に葉笠という村人が解放戦線のゲリラかまったく判別できない衣装で待ち伏せや奇襲をしかけ、訓練生にベトナムでの戦いが一筋縄ではいかないことを知らしめるのに大きな効果をあげた。ベトコンビレッジは基礎訓練が行なわれたほすすべての基地で建設されており、中でもタイガーランドの異名を持つルイジアナ州フォート ポークに作られたベトコンビレッジには病院や指揮所、弾薬庫などが組み合わされた実物さながらのトンネル区画が再現されていたほか、戦争が進むにつれて解放戦線の捕虜収容所を真似た区画を持つベトコンビレッジも現われた。民間人と戦闘員が混在し、交戦距離が非常に近いというベトコンビレッジの訓練環境は後のイラクやアフガニスタンにおける市街戦と良く似ており、現在の訓練施設にもそのコンセプトが受け継がれている。

ここは地獄の一丁目…… アメリカ軍が訓練用につくった “ベトコンビレッジ”

アメリカ軍には戦地の地形や建物をそっくり真似た MOCK TOWN あるいは MOCK VILLAGE と呼ばれる施設がある。戦時にこの施設で訓練を受けた者は、実戦デビューが約束されたと言っても良い。ベトナム戦争によって作られた通称“ベトコンビレッジ”はベトナムに送られる多くの兵士にとって失敗が許される最後の場所となった。
文／鈴木健太郎 写真／WPPアーカイブ、US ARMY

ベトコンビレッジの正門を非常に鮮明に捉えた写真。教官を務めるのはトレードマークのベレー帽で分かる通り陸軍特殊部隊の軍曹で、ノンラーと呼ばれる葉笠と黒い農民服、通称ブラックバジャマに身を包んで自撃砲を運ぶ仮想敵の男たちも特殊部隊員と思われる。門に記されたLANG GIAI PHONGは「解放村」、その下のCOUNTERIN SURGENCYは「反乱対策」、つまりゲリラやテロリストを相手とした戦いを示す。教官の後ろに見える解放戦線旗は戦場土産に目がないアメリカ軍兵士にはたまらないアイテムだが、ブービートラップが仕掛けられている場合も多くベトコンビレッジではこの点についても注意を促していたはずである。1965年 ノースカロライナ州 フォート ブラッグ





鉄のトライアングルで行なわれた「シーダーフォールズ作戦」で、敵が仕掛けたブービートラップを発見。米陸軍第168機甲大隊S-2偵察部隊のトンネルラットが爆破処理の準備をする。1967年1月18日

トンネルラットと呼ばれた兵士たち

Tunnel Rat

Part 4

**敵のネズミを追え
敵がネズミが巣くっていた場所は
なんとクチのベースキャンプ真下だった。
コケにされた米軍は
「クリンプ作戦」で潰しにかかる。**

筆者／オルソン、K.R.とモートン、L.W. Authors/Olson, K.R. and Morton, L.W. 訳と構成／河村喜代子 Edit/Kiyoko Kawamura
写真／米陸軍、ナショナルアーカイブ Photo/US Army, National Archives イラスト／M. Kelly Illustration/M. Kelly

トンネルネットワークが築かれていたクチは、サイゴンから20マイルほどの目と鼻の先。潰したいトンネル網の上に司令部を開いてしまったのは真っ赤な稲妻、トロピックライトニングな面々。夜な夜な、基地の食堂に食料を盗みに、頭の黒いネズミが出没する。武器弾薬まで盗まれて、ようやく、基地の地下にベトコンのトンネル網があると気がついた。

Olson, K.R. and Morton, L.W. (2017) Why Were the Soil Tunnels of Cu Chi and Iron Triangle in Vietnam So Resilient? Open Journal of Soil Science, 7, 34-51. <https://doi.org/10.4236/ojss.2017.72003>
Copyright © 2017 by authors and Scientific Research Publishing Inc.
Unless specifically credited, all photos, drawings and maps belong to the authors Olson, K.R. and Morton, L.W.

3.7 「クリンプ作戦」

「クリンプ作戦」でクチは、生き茂ったジャングルの植生と土壌を失い、まるで月面のようにあばただらけになってしまった。作戦は1966年1月初旬に始まり、B-52爆撃機が、一発30トンの高性能爆弾をクチと鉄のトライアングル一帯のトンネルに降り注いだ。トンネルの内壁は、土壌に含まれる天然の酸化鉄におおわれており、セメント効果を発揮したので、丈夫で、崩れてもすぐに元に戻せた。だから、完全に破壊するのは難しかった。アメリカ軍の第1歩兵師団と第173空挺旅団、それにオーストラリア連隊第1大隊の8000人の兵士が、敵の動きを探っていた。彼らが任務遂行に失敗したというよりも、敵があまりにすばやく、地下トンネルに消えてしまうので、一向に動きをつかめなかったというのが

実情だ。アメリカとオーストラリアの兵士たちは、トンネルを見つけはしたが、往々にしてトンネル規模を過小評価していた。しかも、トンネルにはブービートラップや竹槍が仕掛けられており、内部を探索できなかった[8]。トンネルを掃討する際に、メインにしたふたつの方策とは、手榴弾を投げ入れるか、熱いコールドタームや水、ガスを注入して敵をトンネルの外に出した上で、入口を使えないようにするというものだった。トンネルにはいくつもトラップドアが仕組んであり、空気を浄化する工夫もあったので、どちらの方策も上首尾にはつながらなかった。それでもサンディ・マックグレゴール大佐が率いるオーストラリアの第3野戦部隊特技兵部隊は、まる4日間をかけてトンネルを探索して、ベトコンの兵士がいた証拠と無線装置、武器弾薬、医療品

に食料を発見した[5]。この時、部隊の1人の兵士が行き止まりのトンネルにはまってしまい、戻ってこれなかった。この発見の意義が大とされたのは、トンネルの軍事的重要性に気づけたからだ。その時まで、トンネルの役割は、まったく理解されていなかった。サイゴンで行なわれた「クリンプ作戦」の米豪合同記者会見で、マックグレゴール大佐は、自身の部下である兵士たちをトンネルフェレットと呼んだ。ある記者は、その人物はアメリカ人だったが、フェレットがどんな動物か知らなかったので、代わりにトンネルラットと呼んだ[9][10]。トンネルラットとは、的を得た呼び名だった。それをメディアが使い、やがては軍でも使った。マックグレゴール大佐は、クチでのトンネル発見という功績が認められ、武功十字章を授与された。

トンネルはとてつもない規模で広がっており、「クリンプ作戦」ではとても追いつくものではなく、アメリカ軍と連合軍は別のアプローチをとるべきだと認識した。新たな命令が出され、トンネルを発見したら、その都度、その場で正しいやり方で索敵するようにと命じられた。この戦術を実行するには、訓練を十分に積んだ少人数のエリートグループを投入するほかに、そのためにトンネル戦の技術を習得する熱意と勇気がある兵士を募集した。危険な任務に就く兵士が携行できた武器といえば、フラッシュライトと1本の紐もしくはコードにナイフと拳銃のみだった。トンネルラットたちが、新たに発見されたトンネルに入る際には、ブービートラップがないか、ベトコンが潜んでいないかと、十分な注意を払いながら少しずつ進んでいった。アメリカ陸軍と

ベトナム戦争 資料収集と現地視察

激戦地の戦跡探訪

第1回：南部編

文と写真／三野正洋

長期にわたったベトナム戦争が終結してから数年後、戦史研究のために統一ベトナム(ベトナム社会主義共和国)の“戦後”を確かめようと、ホー・チミン、フエ、ハノイを中心に戦跡を見て回った。各地には兵器の残骸や破壊されたまま、もしくは復旧途上のインフラなど戦争の傷跡がまだ色濃く残っていたが、一方で力強く、したたかに生きる人々の姿があった。



上小写真は、広いデルタの水田。今は平穏な毎日である。右写真は、ホー・チミン市の中央に掲げられた中国との友好を示すポスター。



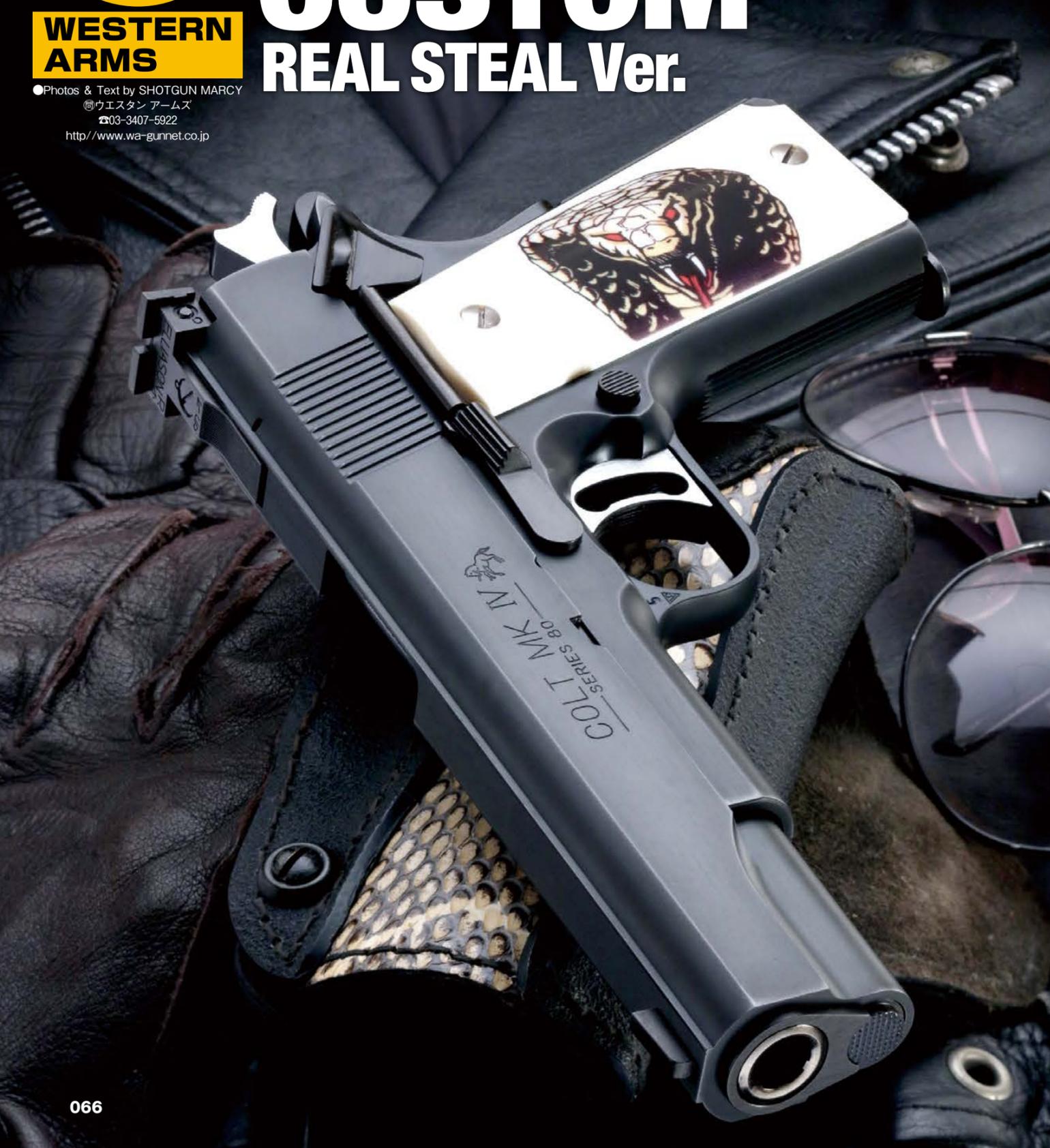
250万人を超す犠牲者を出したインドシナ半島のベトナムを巡る紛争は、朝鮮戦争と共に、第2次世界大戦後の大きな悲劇であった。筆者はこのベトナム戦争に当時から関心を持ち、その経過を追うことに努力を重ねた。この最大の理由は、超大国であるアメリカが、当時のベトナム共和国(南ベトナム)をベトナム民主共和国(北ベトナム)の侵攻から守り切れるのか、と言う知的興味である。最大時には55万名という大兵力を派遣しながら、結局、目的を達成できないままアメリカはこの地を去ることになってしまった。南ベトナムと言う国家は、創設からちょうど20年目の1975年春、永久に姿を消すのであった。その後、数年が経ち混乱がおさまると、統一されたベトナムは次第に外貨獲得のため外国人観光客の受け入れを決める。筆者はこの機会を逃すことなく、3回ほどこの国を訪問し、とくに激戦が展開された地方を見て回った。

右上から左下へ順に、●南部に設けられたアメリカ軍の火力支援基地(FSB)の跡地。赤く錆びた榴弾砲が寂しげである。●ホー・チミン市内の旧政府軍基地M41戦車。すでに雑草に覆われ始めている。●郊外の寺院の庭に忘れられているセスナL-19バードドッグ偵察機。●少しずつ日常に戻りつつあるメコン河沿いの水上マーケット。●デルタの河川機動軍の基地跡。破壊された舟艇の残骸。●現在も使われている旧河川機動軍の棧橋。

見開き写真は、メコン河の支流に搁座したままの河川機動軍の船。上陸用舟艇LST改造の砲艦である。下小写真はメコン本流に残るアメリカ軍の沈没船。右写真は、メコンデルタで転覆したままの河川哨戒艇PRB。大きな穴は前部砲塔の基部である。



COLT COBRA CUSTOM REAL STEAL Ver.



メタル・チャンバカバ
に、使用カートリッジ「9
mmルガー」の刻印。

**コルト・コブラ・カスタム
《リアルスチールVer.》**
●全長:約216mm ●銃身長:約114mm
●重量:約898g ●装弾数:21+1発
●価格:4万6,200円 ●絶賛発売中!!



気シリーズになっている。主演クラ
スのアクションスター達との強力な
コネクションは、俳優として多くの
人気作に出演しているカリスマ性だ
けではなく、スタローンが脚本や製
作にも参加してきたという実績が大
きな要因になっていると言えるだろ
う。出世作となった『ロッキー』シ
リーズで脚本、監督を務め『ランボ
ー』シリーズ2作以降では脚本の共
同執筆、最終作（※おそらく）の『ラ
スト・ブラッド』では原案を提供し
ている。脚本、監督でスタートした

コロナ感染が拡大する直前、2019
年に製作・公開された『ランボ
ー/ラスト・ブラッド(日本公開2020年)』
は、ハリウッドのトップ・アクショ

痛快なまでの毒々しさを 重厚なカッコよさに昇華した ゴールドカップ・コブラ・カスタム!!

ンスター、シルベスター・スタロー
ンの超人気シリーズだ。第1作目の
『ファースト・ブラッド』から37年が
経過しているが、スタローンのエネ
ルギッシュなファイトぶりは、まっ
たく色あせていない。近年では、自
らのコネクションを最大限活用した、
アクション系オールスター作品の
『エクスペンダブル』が、安定した人

『エクスペンダブル』シリーズでも、
2作目以降は脚本の共同執筆を務め
て、シリーズ3作がヒットを記録。す
でに4作目の製作が終わっているが
新型コロナウイルスの影響で、公開は未定
になっているようだ。作品の中心部
分にも参加し、自ら主演するとい
うスタローンの情熱と才能に、ハ
リウッドのトップ・スター達が一目

※撮影用モデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様が異なる場合があります。

スライド後部にフル
アジャスタブル
ライアソン・サイ
トを再現。スライド
トップの低いリップも、
GCNMの大きな特
徴だ。

COLT COBRA CUSTOM

スライド・ストップ
ノッチに、強烈な衝
撃をしっかりと受け
止めるスチール・パ
ーツをインサート。

リアルなアクションを可能にす
るトランスファー・ハンマー・
システム、ビッグ・ボアのプロ
ーバック・シリンダーなどを内
蔵する最新のVer.3メカを採用。



赤い目、赤い舌、そして2本の長い牙。近代
的なGCMをデザイン・ベースに、キャラク
ターの強烈な個性を前面に押し出したコブ
ラ・カスタム。迫力のキックと、高度な実射
性能を備えたコレクターズ・アイテムだ。



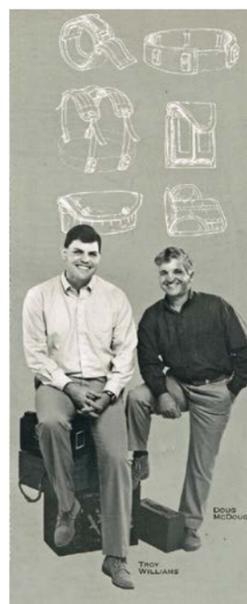
WESTERN
ARMS

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
☎ウエスタン アームズ
☎03-3407-5922
<http://www.wa-gunnet.co.jp>

BERETTA M8045 COUGAR F CBHW



REAL STEEL Ver.



1993年発行 LBTカタログ
 カタログ全体を読んだ感想としては、1990年代初期の段階で現用装備デザインの基本が完成している印象だ。当時の官給品やABA製品などがベースになっていると思われる。カタログをめくると、ビジネス・マネージャーのトロイ・ウィリアムス(左)とオーナーのダグ・マクドゥーガル博士(右)が写っている。その上には草創期に制作されたLBT製品のイラスト(ショットシェルポーチ、H型ハーネス、ベルト・パッドなど)が描かれている。



ショットシェル・ポーチ
 初めてLBTが海兵隊に納品した官給品。



初期の製品にはあの有名なタグはなく、印刷のみとなっている。ライオン・タグになってこのモデルの生産は続いているようだ。ODやTAN色が存在する。



ベルト・パッド
 現在のベルト・パッドとデザインは変わらない。ショットシェル・ポーチのナイロンのみの生地と違い、コットンが含まれている。



こちらも1990年制作のHハーネス。コットン生地が含まれ、アクセサリ金具やドラッグ・ハンドルがまだ付属していない。



SWIMMER'S WEIGHT BEARING VEST
 LBT-1195イスラエル・スタイル

80. SWIMMERS' WEIGHT-BEARING VEST
Israeli style.
 COASTGUARD APPROVED
 FLOTATION CORE OF EVA CLOSED-CELL FOAM. DESIGNED FOR OTB AND LAND OPERATIONS. ACCEPTS ALICE CLIP-ATTACHED POUCHES, SPEC OPS BACK PACK ATTACHES WITH QUICK DISCONNECT KIT. [LBT-0991]
 M203 GRENADE CARRIERS, M16/M4 MAGAZINE POUCHES AND M60 LINKED AMMUNITION POUCHES. [LBT-1195]

LBT-1195に使用しているFASTEXは1993年製。

イスラエル・スタイルとは1970年代からイスラエル軍に採用されている「ISRAELI EPHOD - A10 RECON HARNESS」というコンバット・ベストが元デザインのような。コットン製で、ショルダー・パッドから伸びた3本のハーネスが、クッションを内蔵したポーチ付きカマーバンドを吊り下げた格好となる。面白いのはイスラエル・スタイルながら、その元デザインは1975年に開発されたアメリカ製プロトタイプ・ベストだったと推察されることだ。



LBT-1195イスラエル・スタイルの構造

弾薬装備の負荷を軽減させる幅広いショルダー・ハーネス。浮力と装備重量負荷を分散させる5つに分割されたクッション兼フロート・パネル。専用ALICEポーチ、バックパック等のアクセサリを追加する為の金具とALICEループ、ピストル・ベルト・ループで構成される。

ドラッグ・ハンドルは戦場で負傷した兵士を安全な場所まで引き上げる目的で使われる。



THE EQUIPMENTS OF THE U.S. FORCE



1990年代を代表するSEALギアの「三種の神器」フローテーション・ハーネス。マニアにとってLBT製1195モデルは別格だ。以前紹介したBHI製フローテーション「Hギア」も1993年に登場した事からLBTとBHIがデザインを共有して生産したと思われる。



こちらが1993年製品に付属するLBTを象徴するシルバー(色)ライオン・タグ。1990年代中盤以降は刺繍糸が黄色になりゴールド(色)ライオン・タグと呼ばれる。



ショルダー・ハーネスと脇腹部分にはアクセサリ用金具が付属する。



バックパックを吊るす為に個人が後付け裁縫したFASTEX付きハーネス・カスタム。

NEW ITEM 2022

Photo & Text by Takeo Ishii 株式会社 東京マルイ ☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp

BOLT ACTION AIR RIFLE VSR-ONE

ベストセラー狙撃銃VSRに ミニマルなフォールディング版が登場!

ここ数十年でもっとも多く売れユーザーに愛されているボルトアクション・エア・コッキング・ライフルといえば東京マルイのVSR-10だ。その新バージョン「VSR-ONE」が2021年11月12日配信の「マルフェスONLINE」で発表された。

ルックスは近年の実銃界、サバイバルゲーム界で流行の軽量樹脂製フォールディング・ストック仕様のショートライフル。それに倣ってVSR-10のレシーバーはそのままだに、極太のアウトバーレル、M-LOKスリットを備えたシャーシとフォールディング・ストック、新型マウントレール、大型ボルトハンドル等の新造パーツがテンコ盛り! グリップにはガスブローバックのM4と互換性アリ。



アウトバーレル先端のマズルキャップを外すと14mm逆ネジになっている。

ストック両側面と下部にはM-LOKのスリットが並ぶ。パイポッド装着時のマガジン着脱を考えると手前側にも設けられている。



インナーバレル長は約200mmで驚くほどコンパクト。もちろんシリンダーセッティングは最適化されるハズだがその実射性能や如何に?

- 全長:伸張時800mm/折畳み時615mm
- 重量:約2kg
- 装弾数:30発
- 発射方式:スプリング式エア、可変HOP-UP搭載
- 価格未定(※スコープは別売です。)

レシーバー上部のレールは新規製造パーツ。ピカティニー規格で簡易なフロント&リアサイトも付いている。ロングタイプなのでスコープの選択肢も幅広い。

サイドスイング式ストックは基部もガッシリとした造り。延ばしても折り畳んでも確実にロックされ、もちろん両方の状態での射撃が可能。



シリンダーはVSRシリーズ初採用のブラックメッキ仕上げ。内部もVSR-ONEの短いバレルに合わせた専用セッティングだという。大型ボルトハンドルは樹脂製で着脱可能。

COMPACT CARRY GAS GUN CURVE

コンシールドキャリー・ガスガンに 新製品2モデル&ロングマガジン発売!

実銃同様ダブルアクション・オンリーのシンプルな発射方式。トリガーは軽くて撃ち易く、短いながらも精密な真鍮製インナーバレルに高性能HOP-UPメカニズムを組み合わせ革命的なBB弾の飛びと命中精度を実

現! 「小さくて薄い」という実銃の特性をシンプルな固定スライドガスガンに活かし大ヒットしたコンシールドキャリーガスガン・シリーズに、第1弾「LCP」、第2弾「ボディガード」に続く第3弾&第4弾が登場!

スライド後端やグリップだけでなく、銃口までもが丸く面取りされたデザインが何とも不思議だ。右側にはインサイドパツツでの携帯に便利なクリップを装備。

実銃はトラス製。CURVE (カーブ) の名の通り本体が丸のように湾曲しており携帯時に身体に快適フィットする。

- 全長:132mm ●重量:290g ●装弾数:10発
- パワーソース:ノンフロン・ガンパワー
- 発射方式:スライド固定ガスガン、固定HOP-UP搭載
- 価格:未定

スライド上部の装填インジケーターと後部の白いラインがサイト代わり、という割り切りようが凄い。

ベース部にロックが組み込まれているマガジン。左右から挟むように押しながら引っ張って抜く方式だ。

COMPACT CARRY GAS GUN LCP II

COMPACT CARRY GAS GUN シリーズ専用 ロングマガジン



- 全長:131mm ●重量:267g
- 装弾数:10発
- パワーソース:ノンフロン・ガンパワー
- 発射方式:スライド固定ガスガン、固定HOP-UP搭載
- 価格:未定

LCPと同じく実銃はスタームルガー製。トリガーセフティが付いて安全性が向上。デザインも現代タクトイカル風。

ノーマルの10発→15発に増量できるロングマガジンがシリーズに登場。LCPシリーズ用(左)とボディガード380用(右)が同時発売の予定。価格未定

延長されたマガジンバンパー(マガジンエクステンション)のおかげでグリップが向上。ガス容量、気化室が増加しているため、発射可能弾数、弾速共に向上している。

LCPシリーズ用はLCPとLCP IIが共用できる。ボディガードは専用となる。なおマガジンの固定方法が異なるのでCURVEには共用できない。

マガジンバンパー(マガジンエクステンション)一前部がスライドし、マガジンフォアアーを押し下げる事ができ装弾もラクに行なえる。





PROFILE: JINN村山

1970年代から映画、ドラマ、バラエティ番組の現場で活躍、今も現役バリバリのスチールカメラマン。COMBATマガジンではダチョウ倶楽部 / 寺門ジモン氏の人気連載「ピースメイカー・リターンズ」を長きにわたって担当。もちろん幼少期からのガンマニアでコルトSAAとM1911をこよなく愛し、1981年に日本で最初のトイガン競技「シューターワン・マッチ」が開催された当時からTOPシューターで優勝や上位入賞多数。人気No.1のスピードシューティング競技「JSC(=ジャパンスティールチャレンジ)」およびエアガンによるカウボーイ・シューティング競技団体「JCAST」の創設メンバーにして両方の初代代表を務めた日本シューティング界のパイオニア。

SAAに造詣の深い 大先輩シューター、 JINN村山さんを訪ねた。

実銃のコルトSAAはアメリカ開拓史に深く関わり、「ピースメイカー(=平和を創る者)」の異名まで授かるなど拳銃の歴史に於いて重要な役割を果たした。それは日本のトイガン史に於いても同様で、モデルガン黎明期から幾多のメイカーによってさまざまな「ピース」が商品化され、少年たちマニアたちを夢中にさせて

きた歴史がある。かく言う筆者も7歳の時、人生で初めて手にしたモデルガンは年長の従兄弟が所有していたピースメイカーだった。金色で銃口が塞がれた金属製モデルガンだったが、その重さ、冷たさ、大きさに一瞬で魅せられ魂を鷲掴みにされた記憶は今なお鮮明だ。そんな訳で、マルイSAAは是非と



ご自宅の横には試射レンジ！マルイSAAをポイントシューターで放ち、「中(あた)るねえ〜！面白いねえ〜！ガスが要らないってのもエコで良いねえ〜！」と大絶賛。

「これメッキなの？塗装なの？」と村山さんも不思議がっていたSAAシルバーの美しい仕上げ。色艶や金属感はメッキのようだが、刻印の文字の中まで均一に綺麗に色が入っているのが塗装仕上げ。



も、筆者より年長でSAAに対する造詣の深い、業界の先輩にも評価していただく必要がある、と感じていた。その点で筆者より12歳上、還暦を過ぎた今でも毎週末はシューティングに勤しみ、とくにカウボーイシューティングでは「20代、30代の若者を押さえて優勝する事も今だにある」という村山先輩は正に適任者♪「心配していたのはハンマーを起こす感触だけ、これならゼンゼン悪くないね。ファストドロウ用にチューンしたモデルガンやガスガンとは比べようもないけど、カウボーイシューティングや西部劇サバゲーならまったく問題ないと思う」

マルイSAAを手に入れた早速ガチャガチャやりながら即答してくれた村山さん。「ほら、ダブルならバッチリ決められる♪でもう〜ん、トリプルはちょっと難しいな。」

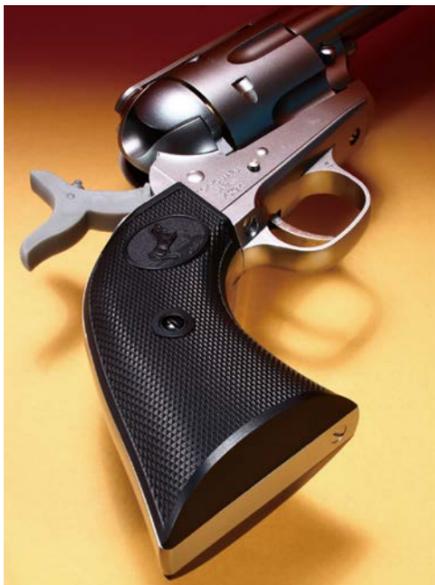
ファングで親指付け根と掌底の両方を使う3連射=トリプルを決めるには相当に練習しこの銃に慣れる必要があるだろう、との見解。またSAAの素早い操作には銃自体の重さとシリンダーが回る際のトルクも重

要だそうで、約1.2kgある実銃の約1/3程度、と軽いマルイSAAではかなりコツが要る、との事。

「コレが発売になったらオレも仲間たちも絶対を買うけど、ヘヴィーウェイト樹脂製のバレルやシリンダーやフレーム、金属製のグリップフレームやインジェクターチューブ、それとフル金属製の重いカートリッジも絶対に欲しくなるだろうなあ！ どうしよう！」と熱く語っておられた。

とくにグリップは所有しているホルスターやガンベルトに合わせるなど「ガンマンの個性を発揮する重要アイテム」なので、アイボリーとかパールとかウッド風など、色々なタイプが欲しいそう。「マルイさんに必ず言っといてよ！」と念を押されてしまった(笑)。

エアシリンダーを内蔵するため「やや大きめ太め」にデフォルメされる比較対象がないと気付かないグリップに、村山さんも「アレンジが上手い！」と感心。「でも簡単に外せるのかな？ 色々な別売グリップは出るかな？」と何度も仰っていた。ちなみにこの写真ではフレームのネジに擬態したセフティがONになっている。



初弾はサミング(=銃を抜いた手の親指でハンマーを起こす)、次弾はファング(=左手の平でハンマーを叩く)の2連発テクニック「ダブル」を鮮やかに決めた村山さん。音が繋がって1発にしか聞こえない事もあった。



Militaria Roundup!

続・アメリカ軍従軍章

兵士が特定の戦争や作戦に参加したことの証として授与される従軍章。
2021年12月号の本稿では第2次大戦におけるアメリカ軍の従軍章を紹介したが、
今回はその続編として現在入手可能な戦後制定の従軍章を紹介しよう。

解説/菊月俊之 写真/青木健格

撮影協力/中田商店 ☎03-3823-8577 <https://www.nakatashoten.com/>

アメリカ軍の勳章分類

2021年12月号で紹介した第2次大戦アメリカ軍従軍章では勳章の簡単な分類について触れたが、今回はその補足としてアメリカ陸軍における勳章の分類を見ていこう。軍隊の勳章は功績に対して授与される武功勳章と、戦争や事変等を記念する従軍章に大別されるが、実際はもう少し複雑で国によって分類には違いが存在する。アメリカ陸軍では、ユニフォームの種類と着用を規定した陸軍パンフレット670-1 (2021年1月26日版) で自軍将兵に佩用が認められた勳章の内訳を指定。以下がその分類だ。

- ①アメリカ軍勳章 (U.S. military decorations/33種類)
- ②アメリカ軍部隊表彰 (U.S. unit awards/18種類)
- ③アメリカ非軍事勳章 (U.S. nonmilitary decorations/24種類)
- ④従軍章&従軍・訓練リボン (U.S. service (campaign) medals and service and training ribbons/35種類)
- ⑤アメリカ海運表彰 (U.S. Merchant Marine awards/15種類)
- ⑥海外勳章 (Foreign decorations)
- ⑦海外部隊表彰 (Foreign unit awards)
- ⑧非アメリカ軍勳章 (Non-U.S. service awards)
- ⑨州兵に対する州の勳章 (State awards for Army National Guard Soldiers)

ちなみに④の従軍章には“サービス (勤務)”と“キャンペーン (戦闘)”の別が存在するが、本稿では一部を除いて「従軍章」で統一させていただいた。

従軍章の付属章(デバイス) DEVICES

アメリカ軍の勳章のリボンにはしばしばミニチュアの徽章が着用される。これは“デバイス (意匠)”と呼ばれ、軍が指定した作戦への従軍、特定の作戦や任務への参加、あるいは複数回の授章等を示すもので、全軍共通のものほか、陸海空軍と沿岸警備隊独自のものが存在。これら付属章は従軍章にも着用されており、代表的なものが①サービス・スターと②アローヘッド章の2種類となっている。

バトル・スター&サービス・スター BATTLE STAR & SERVICE STAR

サービス・スター章はアメリカ全軍対象の付属章で、高さ3/16in (約4.8mm) の五芒星で、銀章と銅 (ブロンズ) 章の2種類が存在。従軍章 (Campaign Medal) の場合は軍が認知した作戦 (戦闘) 期間への従軍を示すものとして着用される。この場合は“バトル・スター”とも呼ばれ、作戦とその期間は軍によって規定されている。サービス・スターの銅章は1つの作戦に参加したことを示し、参加回数が5回の場合は銀章を着用。銀章と銅章を着用 (6回以上の作戦に参加) する場合は銀章をリボンの左側に着用する。

アローヘッド章 ARROWHEAD

1944年12月23日に制定された付属章で、実戦におけるパラシュート降下、グライダー降下、ヘリ攻撃着陸への参加者に着用が認められた。アローヘッド章は制定以前から非公式に着用されていたといわれ、「上陸作戦」への参加も対象とした資料もある。アローヘッド (鐵) 章の着用が認められているのは①アジア・太平洋戦線従軍章、②ヨーロッパ・アフリカ・中東戦線従軍章、③朝鮮戦争従軍章、④ベトナム戦争従軍章、⑤軍遠征章 (Armed Forces Expeditionary Medal) のみ。勳章のリボンおよびリボンバーに着用する場合は鐵の先端を上に向け、サービスまたはバトル・スターの右側と規定されている。



バトル/サービス・スター章 アローヘッド章

付属章の着用例

ここで示したのは第2次大戦中に太平洋戦線に従軍した航空兵の3連リボンバー。勳章内訳は左から航空章 (Air Medal)、アメリカ防衛章、アジア・太平洋戦域従軍章。航空章に付いている付属章は“オーク・リーフ・クラスター (Oak Leaf Cluster)”と呼ばれるもので、勳章を複数回授章したことを示す。変色しているのが向かって左側が5回の授章を表す銀章。左端の従軍章には規定の作戦に従軍したことを表すブロンズ・スター章が4つ付けられている。



アメリカ軍従軍章内訳 (第2次大戦後)
人道章 (Medal for Humane Action)
国防従軍章 (National Defense Service Medal)
朝鮮戦争従軍章 (Korean Service Medal)
南極勤務章 (Antarctica Service Medal)
軍遠征章 (Armed Forces Expeditionary Medal)
ベトナム従軍章 (Vietnam Service Medal)
南西アジア従軍章 (Southwest Asia Service Medal)
コソボ従軍章 (Kosovo Campaign Medal)
アフガニスタン従軍章 (Afghanistan Campaign Medal)
イラク従軍章 (Iraq Campaign Medal)
インハーエント・リゾルブ従軍章 (Inherent Resolve Campaign Medal) ※シリア地域への従軍が対象。
対テロ戦争遠征章 (Global War on Terrorism-Expeditionary Medal)
対テロ戦争従軍章 (Global War on Terrorism-Service Medal)
韓国防衛従軍章 (Korean Defense Service Medal)
軍従軍章 (Armed Forces Service Medal)
人道主義従軍章 (Humanitarian Service Medal)
軍優秀ボランティア任務章 (Military Outstanding Volunteer Service Medal)
陸軍海上勤務従軍章 (Army Sea Duty Ribbon)
軍予備役章 (Armed Forces Reserve Medal)
下士官継続教育リボン (NCO Professional Development Ribbon)
陸軍従軍リボン (Army Service Ribbon)
海外派遣従軍リボン (Overseas Service Ribbon)
陸軍予備役部隊海外派遣訓練リボン (Army Reserve Components Overseas Training Ribbon)
沿岸警備隊特殊作戦従軍リボン (Coast Guard Special Operations Service Ribbon)
空軍戦闘準備章 (Air Force Combat Readiness Medal)
海軍海上任務展開リボン (Navy Sea Service Deployment Ribbon)



従軍の証を授けられるのは人間だけではない。アメリカ軍では連隊旗などの軍旗に部隊が参加した戦闘を記念した“キャンペーン・ストリーマー (Campaign Streamer/ “ストリーマー” は「飾り」の意味) が取り付けられる。キャンペーン・ストリーマーは従軍章のリボンと同じ色の吹き流しで、それぞれに戦いの名前が入る。写真は1956年6月14日に制定された「陸軍旗 (The Army Flag)」で旗竿にキャンペーン・ストリーマーが取り付けられている。(Photo : U.S. Army)

従軍章と除隊ポイント DISCHARGE POINT

第2次大戦では多数の市民が兵士として従軍し、その延べ人数は1611万2566人[※]に達した。このため戦後には兵士の復員と除隊が軍の重要な業務となっている。海外派遣の兵士を順次帰国除隊させるため、陸軍は戦争中に勤務評定に基づくポイント制度を導入。85ポイントで帰国の資格が得られた。ポイントは任務や勤務期間によって加算されるが、授章した勳章もポイントの対象となった。

当時の兵士の関心はポイント数に集中しており、陸軍の週刊誌「YANK」は勳章で加算されるポイントに関して説明している。それによれば「バトル・スター」1つで5ポイント加算 (1943年2月3日号)、「加算されるのは“キャンペーン・スター (バトル・スター)”と以下の勳章が対象。①名譽勳章 (MOH)、②殊勳十字章 (DSC)、③勳功章 (LOM)、④銀星章 (SS)、⑤殊勳飛行十字章 (DFC)、⑥兵士章 (SM)、⑦銅星章 (BS)、⑧航空章 (AM)、⑨戦傷章 (PH)。もし1つの勳章を複数回授章している場合はオークリーフ・クラスターごとにポイントが加算される。(1944年1月19日号)」とある。

※数字はGene Gurney著「Pictorial History of The United States Army」による。

国防従軍章

NATIONAL DEFENSE SERVICE MEDAL (NDSM)

国防従軍章は、1953年4月22日にドワイト・アイゼンハワー大統領による大統領令10488号 (Executive Order No.10977) によって制定。朝鮮戦争 (1950~53年) に従軍したアメリカ全軍と沿岸警備隊のメンバーが対象で、対象期間は1950年6月27日~54年6月27日。授章資格は「軍務における賞賛さるべき行為」とする資料もあるが、対象となる期間 (戦争) への従軍に対して授与されている。

その後国防従軍章は1966年1月11日の行政命令12776号によって、ベトナム戦争に従軍した将兵にも授章資格が拡大された。国防従軍章Mはその後授与が休止されたが、1991年2月21日の行政命令11265号で授章資格に変更が加えられて復活。これは湾岸戦争に従軍した将兵を対象に含めたもので、2003年3月28日の行政命令により、対テロ戦争への従軍者が対象に加えられている。

国防従軍章 授章対象期間

朝鮮戦争	1950年 6月27日~54年 7月27日
ベトナム戦争	1961年 1月 1日~74年 8月14日
湾岸戦争	1990年 8月 2日~1995年11月30日
対テロ戦争	2001年 9月11日~未定

※複数の戦争に従軍し、国防従軍章を授章した兵士は勳章のリボンにブロンズのサービス・スター (従軍章) を着用する。66年の授章対象拡大後は複数回の授章を示す栞葉章 (オークリーフ・クラスター/前ページ「付属章の着用例」参照) が着用されていた。

国防従軍章は現行の従軍章 (サービス。メダル) の中でもっとも古く、序列で第4位に相当。第2次大戦従軍章を除けばアメリカ軍でもっとも多く授与されている。従軍章のデザインは陸軍紋章局のトーマス H.ジョーンズが担当。翼を広げたワシが剣とシュロ (ナツメヤシ) の枝を挿んでいるもので、シュロの葉は勝利や栄光のシンボルとされ、勳章のモチーフとして用いられている。(撮影協力: 中田商店/AS-85 米軍実物勳章 国防メダル/価格800円)



国防従軍章は1953年に制定され、朝鮮戦争に従軍したアメリカ全軍と沿岸警備隊のメンバーに授与された。その後授章対象が変更され、ベトナム、湾岸、対テロ戦争への従軍が含まれている。図版は朝鮮戦争中の1951年2月に発生した砥平里 (チピョンニ) の戦いにおける、第2歩兵師団第23歩兵連隊の奮戦を描いた陸軍公式絵画 (U.S. Army)



名譽除隊章

第2次大戦でが軍を名譽除隊した兵士のための徽章が制定され、これを軍服および民間の私服に着用した。除隊した兵士は除隊後90日間軍服の着用が認められており、菱型の布製徽章 (左側) を左胸に着用した。右の金属製ボタンは、民間の背広等の襟ボタンホールに着用した。この徽章は俗に“ラブチャード・ダック/Raptured Duck (恍惚のアヒル)”と呼ばれた。



現在、従軍章は紙に勳章とリボンを留めた状態でビニールバック。それを紙箱に入れた状態で授与される。箱にはキャラメル箱と貼箱の2種類しており、ここで紹介したのは両方とも1993年製。2種類の箱が平行して使用されたのか、あるいはこの年から箱のタイプが変更されたのかは不明。



箱に貼られた管理用のラベル。アイテム名に“レギュラー・サイズ”とあるが、これは礼装時に着用するミニチュアの勳章と区別したもので、一番下のDLAコード (国防兵站局の発注番号) の表記から今回紹介した国防従軍章が1993年の発注分と判る。